

太佐豊春の画業について —1950～60年代の素描、スケッチから—

平 田 智 美

I はじめに

太佐豊春(1921～2005)は、宮崎県西都市出身の画家である。太佐は、瑛九(1911～1960)との出会いをきっかけに絵画制作を始めた。生涯を通して宮崎県で過ごしており、美術学校等で専門的に学んだことはなかったが、それでも瑛九を介して知り合うことになった多くの画家や文化人たちから学び、得たものは多かったであろう。15歳の時、自由美術家協会展に最年少で入選、20代は戦争などにより制作が滞ったこともあったが、30代前半で公募展において特選を連続受賞、40歳の時にはニューヨークでの日本作家展に招待出品している。作品が評価されると、宮崎県内はもちろん、東京で毎年個展を開催するなど精力的に作品を発表していたが、世界各地で起きた大きな事件や暴動等をきっかけに、「画家は絵を描くべきではないのではないか」との思いにかられ、47歳で“画業廃業”を決意する。その後は、独自の制作活動に取り組みながら南九州短期大学で教鞭をとり、50歳の時にはグループ71を結成、「見ることの追求」をテーマに絵画教室を開くなど、指導者としても活動するようになった。美術教育に携わりながら、生涯制作を続けた太佐は、宮崎の詩人や歌人たちとも交流を深め、郷土の文化界に大きな足跡を残している。

太佐が大きな影響を受けた瑛九についての評論や新聞記事は多いが、太佐自身についての論考はあまり残されていない。作品についても、当館では前身である宮崎県総合博物館時代に水墨画(1973年作)1点、美術館が開館した翌1996(平成8)年に油彩画(1954年作)1点を収集所蔵するのみであったが、2017(平成29)年になって水墨画(1968年作)1点、翌年には多数の素描やスケッチがグループ71のメンバーよりまとめて寄贈された。それらの素描やスケッチの主な内容は、太佐が画家として評価され、積極的に活動していた1955年から1960年代初期までのものである。本稿は、これらの素描やスケッチ等を調査し、太佐の画業とともにまとめたものである。

II 画家・太佐豊春

本論に入る前に、画家・太佐豊春の活動について触れておきたい。ここでは、主に太佐が瑛九との出会いを経て、画家として歩み始めた1935(昭和10)年頃から、今回調査した素描やスケッチが描かれた1960(昭和35)年頃までについて記す。

1. 瑛九との出会い—揺籃期(0～15歳)

1921(大正10)年、太佐豊春は現在の宮崎県西都市妻に生まれた。父は鹿児島出身のナタネ油商で、家を留守にすることが多く、少年時代の太佐は母と二人暮らしのような日々を送っていた。この頃の日本は急速な近代化が進められていた時期であ

る。当時、妻町は県営鉄道による経済発展で商業の中心となっており、教育・文化のレベルを上げる目的で、1923（大正 12）年には、西都市に旧制県立妻中学校が開校した。太佐が通ったこの旧制妻中学校の同級生に、瑛九の甥に当たる郡司盛男がいる。親しい友人だった郡司に誘われて出かけた先で、太佐は瑛九と出会った。1935（昭和 10）年の暮れのことである。当時 24 歳だった瑛九は、10 歳年下の太佐に、西洋の芸術について語り続けた。太佐はこのときの瑛九について、1996（平成 8）年 5 月 26 日の宮崎日日新聞で「日本画壇の劣悪な制度、美意識を辛辣にこきおろすのだが、その大言壮語には説得力があった。僕はその話に丸ごと飲み込まれていった」と述べている。文学少年でシュルレアリスムの世界に憧れていたという太佐は、瑛九の話に引き込まれ、年が明けた 1936（昭和 11）年 1 月まで泊まり込みで瑛九と行動を共にしていた。この頃、瑛九の暗室での仕事が始まり、太佐は助手を務めたという。このとき誕生した瑛九のフォトグラムは高く評価され、代表作の一つとなったのがフォト・デッサン集『眠りの理由』である。

また太佐は、瑛九を介してアルプやクレー、モンドリアン、カンディンスキーなどに影響を受け、15 歳の時にシュルレアリスム風の作品や抽象的な作品の制作に取り組み始めたという。瑛九との関わりの中で、太佐は多くの文化人とも交流を持つことになるが、太佐が自身の個展¹のリーフレットに“自伝的”として掲載した略歴には、1936（昭和 11）年に「宮崎高等農林学校の教授であった北尾淳一郎から西欧美術史のロマン主義的自然観を学び、オノサト・トシノブと交友自宅で 1 か月同居制作する」との記載が見られる。北尾は芸術にも造詣が深く、瑛九と二人展開いたり自由美術家協会展にて作品を発表したりしていた。1937（昭和 12）年 3 月 3 日の宮崎新聞には、北尾による太佐の作品評が掲載されており、既にこの頃の二人に接点があったことが確認できる。一方、オノサトとの交友については、「自宅」が東京のオノサト宅のことなのか他に資料がなく判然としないが、オノサト・トモコ著『オノサト・トシノブ伝』には、瑛九と出会ったオノサトが、この年の 2 月中旬に意気投合した瑛九を自分の下宿に泊めたことが記されている。もしかするとそこに太佐も帯同しており、共に過ごしていたのかもしれない。

2. 画家として①ー成長期（16～25 歳）

1937（昭和 12）年 2 月、長谷川三郎を中心に、瑛九、浜口陽三、村井正誠、矢橋六郎、山口薫らにより自由美術家協会が結成された。この年に開催された第 1 回自由美術家協会展に 16 歳の太佐は郡司と共に作品を出品、最年少で入選を果たしている。自由美術家協会は、日本の既存画壇を批判し、新しい美術運動を推進するという性格を強く持っていた。ここに集った若手の作家たちと同様に、太佐は当時西洋からもたらされた最新の芸術運動であるシュルレアリスムや抽象表現を積極的に取り入れて制作してい

¹ 1988（昭和 63）年に東京銀座の玉屋画廊で開いた「太佐豊春 1968 年展'88」のこと。

た。7月に日中戦争が起こると、美術界は次第に自由な創作活動に対する制限や弾圧を受け、沈滞していく。太佐はデッサンや油彩の制作を続けていたが、1942（昭和 17）年、21歳の時に召集され戦線に派遣されることになった。復員したのは、終戦後の1946（昭和 21）年だった。帰国した太佐は、日本共産党に入党して活動し、絵画制作を再開するのは、もう少し先のことになる。

3. 画家として②ー展開期（29～34歳）

1950（昭和 25）年、太佐は二つの絵画グループの結成に関わった。一つは瑛九と結成した宮崎自由美術クラブ、もう一つは冬芽会である。

宮崎自由美術クラブは、自由美術家協会展に出品している作家を中心に、宮崎で結成された絵画グループである。創立メンバーは瑛九、太佐豊春、内田耕平ら11名で、同年5月に第1回展を開催している。冬芽会は、伊東旭、太佐豊春、仲矢勝好、谷川信夫らによって結成され、第3回展まで開催された。

この頃日本は不況にあえいでいたが、朝鮮戦争による特需景気をきっかけに、経済復興への道を歩み出していた。翌年には国内初の公立の近代美術館となる神奈川県立近代美術館が開館するなど、美術界も息を吹き返していく。画家たちは社会や政治が急激な変化を遂げる中で、新たな芸術を生み出そうとしていた。

太佐は、略歴に1952（昭和 27）年の出来事として「共産党脱党、国際派分派として除名」「再び現代美術の制作を試みはじめる」と記している。前述した二つの絵画グループの結成から2年が経過しているが、太佐にとって、ここからが改めて制作と向き合う時期となったのではないだろうか。

1953（昭和 28）年の宮崎県展（後の宮日総合美術展）で、太佐は初出品で特選を受賞する。この年、太佐は瑛九のフォト・デッサンの個展のために上京し、久保貞次郎や植村鷹千代、北尾淳一郎の協力を得て上野松阪屋で個展を実現するが、瑛九から日程に余裕がなかったなどの不満をもらされたことで距離を置いている。

瑛九との絶交はその後1年程続くが、太佐は1954（昭和 29）年の宮崎県展で前年に続き特選となるなど活躍を見せていた。この時の審査員は、当時熊本に居を構え、既に大家として地位を確立していた海老原喜之助である。海老原については、1948（昭和 23）年に宮崎の瑛九を訪ねたエピソードが残っているが、太佐と海老原との初めての出会い、出品者と審査員としてではないかと思われる。この頃の宮崎県展では、審査員と受賞者の懇談会が開かれていた。その機会であっただろうか、太佐は海老原から作品を高く評価されて賛辞を贈られている。この出来事は太佐にとって大きな自信となり、また制作の励みにもなったと思われる。

1955（昭和 30）年、太佐は浦和から個展のために帰郷した瑛九の訪問を受け、二人は和解した。互いに個展評を日向日新聞に寄稿しており、これらが新聞社の依頼によるものかそれぞれの指名によるものかは不明だが、太佐は既にこの時、宮崎において「瑛九」を語るのに相応しい画家と評価されていたのだろう。

4. 東京での個展—成熟期（35～38 歳）

1956（昭和 31）年から 2 年間の太佐の個展等の記録は不明だが、太佐が瑛九の個展を見た記録が残っていることなどから、交流は続き、互いに熱心に制作に取り組んでいたと思われる。しかし 1958（昭和 33）年、瑛九の勧めで計画、準備していた東京での初個展が実現しなかったことから、太佐は再び瑛九に不信感をもち、一方的に関係を断っている。その後、東京でのデモクラート美術家協会の立ち上げに瑛九と共に関わった加藤正の計らいや、海老原喜之助の力添えにより、太佐の東京での個展は実現した。この個展について、1959（昭和 34）年の宮崎県年鑑には「毎年の個展で精進ぶりをみせている太佐豊春は、1958 年 7 月に東京銀座の個展で好評を受けるなど、非具象派の活躍がめだった」との一文がある。これ以降太佐は、1965（昭和 40）年までに東京での個展を 11 回開催している。会場となったのは同じ画廊ではなく、銀座や新橋、赤坂など様々であった。また、同 1958（昭和 33）年の日本経済新聞には、美術評論家の植村鷹千代による作品解説が掲載され、翌年には、同じく美術評論家であり文芸評論家でもあった針生一郎による個展評が芸術誌に紹介されたとの記載もあり、東京の文化人や作家たちと交友が広がっていたこともうかがえる。この時期、太佐は精力的に作品の発表を続け、充実した日々を送っていた。なお、当館に寄贈された素描とスケッチは、主にこの時代のものであるが、詳細については次章で触れたい。

5. 瑛九の死と画業廃業—到達期（39～46 歳）

1960（昭和 35）年 2 月、銀座で個展を開くために上京していた太佐は、オノサト・トシノブから瑛九が危篤であることを知らされる。翌日には病状が少し持ち直したこと、瑛九自身の希望で近作の油絵を発表する運びになったことなどを聞き、後日東京の兜屋画廊でその個展を見たという。瑛九はその数日後の 3 月 10 日に他界、太佐は瑛九の逝去に際し、20 日の日向日日新聞に後述の芸術論²を寄せている。その後太佐は、東京での個展に加え、池田満寿夫らと共に 1961（昭和 36）年のニューヨーク現代作家展に招待出品するなど、発表の場を広げていた。東京の日本橋画廊と契約を結び、画家としてのキャリアも順調に積んでいった。太佐のアトリエには初期の油彩画がほとんど残っておらず、それは画廊と契約をした時に手放したからだという。

1965（昭和 40）年 8 月、日本橋画廊での個展のカタログには、脇田和、植村鷹千代、針生一郎からの言葉が寄せられた。同年 10 月号の『芸術新潮』には山本太郎による紹介記事³が掲載され、11 月には新宿の画廊で開いた個展のカタログに大岡信が寄稿するなど、1960 年代前半は太佐にとって、画家としての評価を確固たるものとした時期であった。しかし、太佐はその年の終わりを待たずに画廊との契約を破棄し、その後東京での個展からも遠ざかっている。

² 昭和 35 年 3 月 20 日付日向日日新聞「いつの場合も眞実に仕えた瑛九の芸術」『文化と家庭』

³ 山本太郎「太佐豊春個展 発表会まで・22」『芸術新潮』190 号、新潮社、1965 年 10 月号

1968（昭和 43）年には“画業廃業”を決意し、「その決着として」多数の水墨の作品を制作している。後に太佐は、この頃の作品について「わりと絵として出来上がったある時代（中略）ある時期の一つの完成期にあった作品」と語っている。その後の作品群を見ると、表現方法や色彩は自由になり、ひとところに留まらず常に変容しているように感じられるが、その後の太佐について論じるのは次の機会としたい。

Ⅲ 素描及びスケッチについて

ここに記す素描とスケッチについては、先に述べたように 2017（平成 29）年にグループ 71 のメンバーから寄贈されたものである。ここでは、これらの素描等を制作年毎に整理した表とあわせて、各年の太佐の動向や周囲からの評価等についてまとめた。表にある「管理番号」とは、寄贈を受けた際に撮影した順番により画像に振り分けた番号及び当館における分類番号である。素描等の半数程にはサインや制作時期が記入されているため、ここでは年代順に整理しており、管理番号は前後している。また、1958 年、59 年作で月日も記入されたものについては、各年の中でさらに月日順に並べた。支持体はいずれも紙であり、用紙の枚数を数えると 188 枚だが、両面に絵が描かれているものもあるため枚数と作品数とは異なる。なお、両面に絵が描かれたものについては、以下のことを表裏の判断基準とした。

1. サイン等の有無 2. 着色の有無

サインや年記以外に書かれている文字も記載している。画材、表現等は様々で、素描、スケッチという分類が適正であるか、完成された作品と捉えるかについては、今後調査、検討が必要なものもある。

【1955（昭和 30）年】

瑛九は、この年の太佐の個展について 1955（昭和 30）年 5 月 10 日付宮崎日日新聞に「太佐豊春君のデッサン」を寄稿しており、高く評価している。

彼から多数の油絵とデッサンをみせてもらった 僕は多数の彼の作品の中で近作のデッサンに最も心をひかれた（中略）太佐君は非常な勉強家であり努力家である。彼の多数のデッサンを見ていると第一に感じられるのはそれである。そういう努力感が画面に迫力をあたえることもあるが、また時にきゅうくつな理屈っぽい感じを与えることもある。しかし大体がのんびりしすぎている宮崎では彼の努力感の一つの貴重なものであるに違いない。彼のデッサンはフォルムもトーンもある程度の完成されたものをもっている。

この時期は主にペン描きが多く、モチーフも無機質なものの集合体や格子状の網のようなもの、あるいはこれらが人の顔を覆うように表現されているものが多い。

管理番号	176(D-323)	176(D-323)裏	10	10裏	175	175裏
記載内容	年	55	55		55	
	月 日					
	サイン	tasa	tasa		tasa	
備考(その他の記載等)		㊹ ※○に数字は、裏面に書かれたもの		㊹		⑤

管理番号	62	85	85裏		111	111裏
記載内容	年	55	55		55 56	
	月 日					
	サイン	tasa	tasa		tasa	
備考(その他の記載等)			灰の中の人		※年記は55か56か判別が難しい	

【1956・1957（昭和31・32）年

昭和31年、32年の2年間は、はっきりとした個展等の記録がなく不明だが、太佐は個展だけでなくグループ展などにも参加しており、何らかの形で作品を発表していたと考えられる。1991（平成3）年1月10日付宮崎日日新聞に掲載された金丸柊一「太佐豊春の絵と思想」には、当時の太佐の作品について次のように書かれている。

（前略）1956年のドローイングは、そのどれ一つとっても人間の内奥にひそむデーモンとエロスを執ように表出してあますところがないほどである。画家は怖れたじろがずに人間の内奥を見据えようとするから、それを見るものは、反って怖れたじろぐことになる。

この頃の太佐の絵には人の顔がよく登場しているが、その顔は手や植物のようなもので覆われており、表情がうかがえないものや無表情のものである。金丸が「人間の内奥」と繰り返し述べたように、太佐が描きたかったのは「顔」ではなく、そこからにじみ出た心象であろうか。また、植物や人工物を連想させる抽象的な構成によるものもある。

なお、この頃の瑛九はリトグラフの制作に没頭するようになっており、シュルレアリスム的な表現から抽象へと展開していく時期である。宮崎市で「瑛九石版画展」が1957（昭和32）年の1月20日から22日まで開かれており、太佐が「瑛九リトグラフ鑑賞会『MEMO』」

と表紙に書いたノートが写真に残っている。この石版画展とは前後するが、太佐が 1956（昭和 31）年に制作した題不明の素描（管理番号 163/D-324）は、1955（昭和 32）年の瑛九作「シグナル（B）」を連想させ、構図やモチーフに類似点を見出すことができる。意図的あるいはオマージュ的要素があるのか不明だが、瑛九の影響が大いに感じられる作品である。



太佐豊春 題不明 1956 年
※管理番号 163 (D-324)



瑛九「シグナル（B）」1955 年

1996（平成 8）年付 4 月 24 日付宮崎日日新聞に掲載の太佐豊春「前衛画家 瑛九の再検証」では、1957（昭和 32）年に瑛九から太佐に送られた手紙の一部内容が引用されている。

あなたは腕が立つので何でもかきこなすことが出来る。だから描くことから出発しているのかもしれませんが。（中略）ただ僕は描くことは生活の結果にすぎず、描くことでは何も発展させることができないタイプです。……その意味であなたは描くことによって発展するタイプかもしれません。（中略）あなたのデッサンが、かなりの力をもっていること、それが客観的には相当貴重なものであることはわかります。……僕はあなたがあなたの方向を発見し発展されることをのぞんでいます。僕は奥であなたの才能を羨望しません。

太佐はこれについて、「これは愛と憎しみに満ちた挑戦であり、ラブレターだと思っていますが、瑛九の芸術の根底にある何かを支持するものがあります」と記している。

管理番号	155	155裏	171 (D-325)	171 (D-325)裏	168	168裏
年	56		1956		56	
月 日						
記 載 内 容						
サイン	tasa		toyoharu tasa		tasa	
備考(その他の 記載等)		①		③		⑩

記載内容	管理番号	154	154裏	163(D-324)	163(D-324)裏	6	6裏
	年	56		56		56	
	月 日						
	サイン	tasa		tasa		tasa toyoharu	
備考(その他の記載等)			②②		38×53.6 ①⑨		
記載内容	管理番号	166(D-326)	5	101	91	165(D-327)	165(D-327)裏
	年	56	1956	56?	57	57?	
	月 日			7.14		5.3	
	サイン	tasa	toyoharu tasa	toyoharu	たさ	toyoharu tasa	
備考(その他の記載等)					※裏に 男3と記載有		⑨

【1958（昭和 33）年】

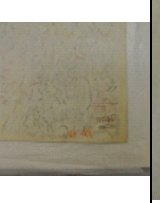
線が絡まるように描かれたものや、樹木を連想されるもの、人の顔のように見えるものなど様々であるが、何らかのモチーフを描いたというよりも、イメージを抽象的に表現したようなものが多い。また、太佐のサインは筆記体のようなローマ字で名前が書かれているものがほとんどだが、この年に描かれた 1 点には、他とは違う直線的なゴシック体で「PAINTING BY 1958 TOYOHARU TASA MIYAZAKI」と記されたものがある。「MIYAZAKI」の文字を入れたのは、宮崎から中央へ向けた発信の意味が込められていたのだろうか。

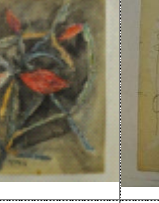
この年太佐は、1 月に宮崎市の山形屋で吉加江京司、仲矢勝好、谷川信夫、東京在住の加藤正らと 6 人展を開催。前述のとおり、自身初の東京での個展を計画していたが、瑛九の発言により叶わなくなったことに不信を抱き、再び決別する。瑛九と距離を持った太佐だが、東京での初個展は加藤らの尽力により 7 月に実現した。以下、東京の個展を見た美術評論家二人による作品評の一部を記す。

これは、その中の一点で、明るく多彩な色をもつ水彩であるが、個性的なフォームに新鮮なエスプリが表出されている。幻想的というよりも、南国らしいロマンチックな詩情を感じさせるエスプリで、それがすがすがしい空間表現を見つけているところが才能的である。(植村、1958 年)

年譜によると、わたしが太佐豊春の作品をはじめてみて、個展評を書いたのは1958年のことだ。それは鉛筆、クレパス、インクで人間の顔、手、男女の性器などをデフォルメしながら、存在の亀裂をすどく露出させたデッサン群だった。(針生、1988年)

植村の文面からは爽やかな印象を持つ作品が想像できるが、紙面に掲載されている作品画像はモノクロであり、該当する作品の行方も不明のため、残念ながら確認することができない。同じくこの個展を見た針生の回想から連想される作品イメージは、また異なるものである。

管理番号	170(D-328)	170(D-328)裏	177	177裏	183	183裏
年	58		58		58	
月 日	4.3*					
記載内容						
サイン	toyoharu tasa		toyoharu tasa		tasa	
備考(その他の記載等)		49 ※いくつも数字を書き直している		5		14

管理番号	80	80裏	157	157裏	160	160裏
年	58		58		58	
月 日						
記載内容						
サイン	たさ?		toyoharu tasa		toyoharu tasa	
備考(その他の記載等)						㊟

管理番号	161	161	161裏
年			
月 日			
記載内容			
サイン			
備考(その他の記載等)	PAINTING BY 1958 TOYOHARU TASA MIYAZAKI	※サイン部アップ	

表の月日の欄に*をつけているものは、年代の近くに書かれている分数のような数字を月日の記載とみなしたものである。

【1959（昭和 34）年】

今回寄贈された中では、1959（昭和 34）年制作の作品が一番多く、3 月の日付にはじまり半数以上に月日も記載されている。3 月の作は更紙様の薄い紙にペンで針金で作ったような人物の人体が描かれており、スケッチのような意味合いが強いと考えられる。5 月の作では、画面を埋め尽くすようなペンの線と木炭の濃淡の中に、人の形が浮かび上がるように描かれ、7 月には何かを掲げるようなポーズをとる人の姿が登場している。この力強さを感じさせる人物像は、着色されたものも含め複数点制作されている。以降は 8、9 月、12 月の日付があるが、引き続き人物の姿やまた顔が描かれているものが多い。年間を通して見ると、同時期に同じようなモチーフ、表現で繰り返し描かれていることが分かる。一つのテーマを追究する太佐の姿勢が垣間見えるようである。一方、日付が入っていないものには、人物をモチーフとしたものに加え、抽象的な表現も数多く見られる。これらの表現には、58 年や 60 年に描かれたものとの類似も認められる。

管理番号		99	7	8	9	98	97
記 載 内 容	年	59	59	59	59	59	59
	月 日	3.8*	3.12*	3.12*	3.12*	3.12*	3.15*
							
	サイン	tasa	tasa	toyoharu tasa	toyoharu tasa	tasa	toyoharu tasa
備考(その他の記載等)							

管理番号		162	162裏	84	116	158
記 載 内 容	年	59		59	59	59
	月 日	3.24*		3.24*	3.26*	5.18*
						
	サイン	toyoharu tasa		toyoharu tasa	toyoharu tasa	toyoharu tasa miyazaki
備考(その他の記載等)			No.68			

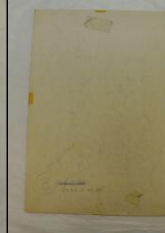
管理番号		167(D-333)	167(D-333)裏	172(D-444)	172(D-444)裏	179(D-330)	179(D-330)裏
記 載 内 容	年	59		59		59	
	月 日	5.20*		5.20*		5.27	
							
	サイン	toyoharu tasa miyazaki		toyoharu tasa		toyoharu tasa	
備考(その他の記載等)			87		No.66 ○に47 ※数字の書き直し有		④④

管理番号		159	159裏	147	147裏	31
記 載 内 容	年	59		59		59
	月 日	5.27		6.2		6.3
						
	サイン	toyoharu tasa miyazaki		toyoharu tasa		toyoharu tasa
備考(その他の記載等)						

管理番号		143	143裏	138	137	137裏	47(D-331)
記載内容	年	59		59	59		59
	月 日	6.6*		6.7	6.18		6.18
							
	サイン	toyoharu tasa		toyoharu tasa	tasa		toyoharu tasa
備考(その他の記載等)			○にB (タテ)34.3 ×(横)25.5				

管理番号		37	13	13裏	119	66	35
記載内容	年	59	59		59	59	59
	月 日	6.19	6.28		6.30日	7.1	7.3
							
	サイン	toyoharu tasa	toyoharu tasa		toyoharu tasa	tasa	tasa
備考(その他の記載等)		MIYAZAKI					

管理番号		4	4裏	95	95裏	43	126
記載内容	年	59	59	59		59	59
	月 日	7.7	7.6	7.6		7.13*	7.13
							
	サイン	toyoharu tasa	tasa No.10	toyoharu tasa		toyoharu tasa	tasa
備考(その他の記載等)							

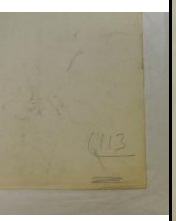
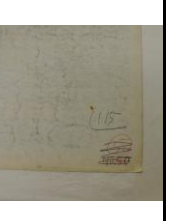
管理番号		142	142裏	40	76	123	123裏
記載内容	年	59		59	1959	59	
	月 日	7.22		8.31	8.31	9.21*	
							
	サイン	tasa		toyoharu tasa	toyoharu tasa	toyoharu tasa	
備考(その他の記載等)			○にA (タテ) 25.5×(ヨコ)33				○にC 縦26×横 37

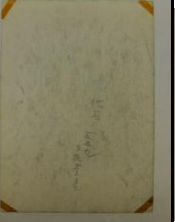
管理番号	50	49	49裏	19	90	152
年	59	59	一九五九	59	59	59
月 日	12.11	12.15		12月15日	12.15	12.24
記載内容						
サイン	toyoharu tasa	tasa	太佐豊春	tasa	tasa	toyoharu tasa
備考(その他の記載等)			涙			

管理番号	117	117裏	118	118裏	130	131
年	59			59	59	59
月 日	12.24			12.24		
記載内容						
サイン	tasa			tasa	tasa	tasa
備考(その他の記載等)					12	10

管理番号	96	72	93	1	1裏	107
年	59	59	59	59		59
月 日						
記載内容						
サイン	toyoharu	toyoharu tasa	tasa	toyoharu tasa		toyoharu tasa
備考(その他の記載等)			※裏に86(画像無し)		No.100	

管理番号	54	54裏	59	59裏	83	83裏
年		59		1959	59	
月 日						
記載内容						
サイン		toyoharu tasa		toyoharu tasa	tasa	
備考(その他の記載等)						

管理番号		38	181(D-329)	178(D-335)	178(D-335)裏	173	173裏
記 載 内 容	年	59※	59	59		59	
	月 日						
							
	サイン	tasa toyoharu	toyoharu tasa	toyoharu		tasa toyoharu	
備考(その他の記載等)		59は左右に2つ記載			113		115

管理番号		188	30	30裏	156	144	144裏
記 載 内 容	年	59	59	一九五九	59	59	
	月 日						
							
	サイン	toyoharu tasa	tasa	太佐豊春	toyoharu tasa	toyoharu tasa	
備考(その他の記載等)				化石			

管理番号		51	53(D-332)	174	174裏	127	127裏
記 載 内 容	年	59	59	59		59	
	月 日						
							
	サイン	tasa	toyoharu tasa	toyoharu tasa		toyoharu	
備考(その他の記載等)					40		

管理番号		18	28	64	64裏
記 載 内 容	年	59	59	59	
	月 日				
					
	サイン	tasa	tasa	toyoharu tasa	
備考(その他の記載等)			? 7		

【1960（昭和 35）年】

この年はモチーフ、表現ともに前年と大きな変化は見られないが、瑛九が亡くなった3月には、繭の塊のようなものが初めて登場している。この塊のような形が、瑛九の死と何らかの関係があるかは不明だが、翌年にも形や模様を変えて描かれている。

太佐が瑛九危篤の知らせを聞いたのは、銀座での個展のために上京した2月のことだった。生前最後となった個展を見た後、瑛九逝去の知らせを受けた太佐は、3月20日付の日向日新聞に瑛九についての一文を寄せる。以下はその一部である。

瑛九の死を知ったそのとき私は決して悲しんだり驚いたりしなかったが、突然私の前に一つの明確な事実だけは、非情につきつけられた思いであった。そして今日まで、その何ものかへ向かって私が決意を迫られているような、そんな感情につかわれている（中略）瑛九はこの不毛の地に近代絵画の伝統を初めて打ち立てた革命的な作家であった。私たちはその旗をおしすすめるだろう。かばねを超えて進むだろう。亡霊の一群と共に。

太佐にとって瑛九は憧憬の対象であったことに違いはない。しかし、心酔するだけでなくときに自ら距離を置いた太佐は、静かにそして確かに瑛九の死を受け止めたのであろう。これを機に、太佐は改めて「芸術とはなにか」に対峙し、表現することへの覚悟が定まったように思う。

管理番号		36	135	120	120裏	140(D-339)	151(D-337)
記載内容	年	60	60	60		60	60
	月 日	1.1	1.1	1.1		1.4	1.5
							
	サイン	toyoharu tasa	toyoharu tasa	toyoharu tasa		toyoharu tasa	tasa
	備考(その他の記載等)						
管理番号		75	75裏	78(D-338)	42	67	44
記載内容	年	60		60	60	60	60
	月 日	1.6		1.6	1.28*	3.19*	5.16*
							
	サイン	toyoharu		tasa	toyoharu tasa	toyoharu tasa	toyoharu tasa
	備考(その他の記載等)						

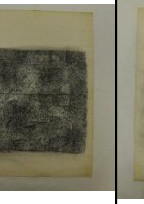
記載内容	管理番号	125	125裏	106	112		
	年	60		60	60		
	月 日	6.1(2?)9		9.6	12		
							
	サイン	toyoharu tasa		toyoharu	tasa		
備考(その他の記載等)			No.1				
記載内容	管理番号	2	20	109	129	124	121
	年	60	60	60	60	60	60
	月 日						
							
	サイン	toyoharu	toyoharu	tasa	tasa	toyoharu tasa	toyoharu
備考(その他の記載等)							
記載内容	管理番号	32	32裏	65			
	年	60		60?			
	月 日						
							
	サイン	toyoharu tasa		toyoharu tasa			
備考(その他の記載等)							

【1961（昭和 36）、1962（昭和 37）年】

1961（昭和 36）年の作には、前年と同じモチーフやテーマのものが見られる。記載された制作月は 3 月までなので、同じテーマで制作に取り組んだ一連のものなのかもしれない。

この年太佐は、池田満寿夫らと共にニューヨーク現代作家展に招待出品、翌 62 年の展覧会記録は確認できないが、1965（昭和 40）年まで東京で毎年個展を開いている。1965 年 10 月号の『芸術新潮』に掲載された山本太郎による「太佐豊春個展」には、日本橋画廊で開かれた個展について記されている。この時期に制作された水彩画に触れた 1 文を紹介する。

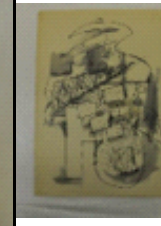
(前略) 61、2 年代の作品はいずれも密度が濃く作品としてある完成度を示しており、65 年度のいわゆる最新作は、色も形も不安定で、かなり浮ついている、というのが第一印象だった。前者では、作者が意識的に引いた線條が不定形の色塊の間に美しく結び、作者の内面的な心理表現になっていた。

記載内容	管理番号	81	146	122	41	48	132(D-336)
	年	61	61	61	61	61	61
	月 日	1.20*	3.18	3	3	3	
	記載内容						
	サイン	toyoharu tasa	toyoharu tasa	toyoharu tasa	toyoharu tasa	toyoharu tasa	toyoharu tasa
備考(その他の記載等)							
記載内容	管理番号	17	39	73	73裏	23	23裏
	年	61	61	61		61	
	月 日						
	記載内容						
	サイン	toyoharu	tasa	toyoharu tasa		toyoharu tasa	
備考(その他の記載等)							
記載内容	管理番号	100	100裏	114	133	149	46
	年	61		61	61	61	62
	月 日						
	記載内容						
	サイン	tasa		toyo	toyoharu tasa	toyoharu	toyoharu tasa
備考(その他の記載等)							

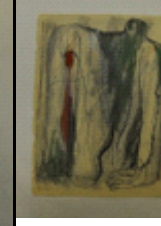
【制作年不明、1989（平成 2）年】

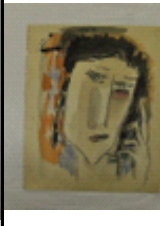
年代が記載されておらず、制作年不明のものが 60 点程ある。モチーフや表現に類似が見られるものを、それぞれまとめて掲載した。制作年が確定しているものとの類似から制作されたおおよその年が推定できるものもあるが、ここでは制作年不明としてまとめる。また、1 点しか確認できなかった 1989（平成 2）年の作も併記した。

管理番号		3	11	113	136	16	89
記載内容	年						
	月 日						
							
	サイン						
	備考(その他の記載等)						
管理番号		15	104	69	70	102	
記載内容	年						
	月 日						
							
	サイン						
	備考(その他の記載等)						
管理番号		22	24	25	26	26裏	68
記載内容	年						
	月 日						
							
	サイン						
	備考(その他の記載等)						
管理番号		180	27	27裏	29	33	34
記載内容	年						
	月 日						
							
	サイン						
	備考(その他の記載等)						

管理番号		108	108裏	12	94	141	187
記 載 内 容	年						
	月 日						
							
	サイン						
備考(その他の記載等)							

管理番号		52	52裏	55	56	57	60
記 載 内 容	年						
	月 日						
							
	サイン						
備考(その他の記載等)							

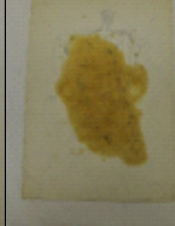
管理番号		14	58	58裏	61	61裏	63
記 載 内 容	年						
	月 日	1.21*					
							
	サイン	toyoharu					
備考(その他の記載等)							

管理番号		88	86	86裏	71	74	77
記 載 内 容	年						
	月 日						
							
	サイン						
備考(その他の記載等)							

管理番号		82	79	87	182	184	185
記 載 内 容	年						
	月 日						
							
	サイン						
備考(その他の記載等)							

管理番号		103	115	115裏	128	134	139
記 載 内 容	年						
	月 日						
							
	サイン						
備考(その他の記載等)							

管理番号		145	148	150	153	164	164裏
記 載 内 容	年						
	月 日					5 ?	
							
	サイン	toyoharu tasa			toyoharu tasa	toyoharu tasa	
備考(その他の記載等)						数字不明瞭	フタカマボコ

管理番号		186	105	110	21	21裏	45
記 載 内 容	年						
	月 日						
							
	サイン						
備考(その他の記載等)							馬の假面を背負った男

管理番号		92	92裏	169	169裏
記 載 内 容	年			1989	
	月 日				
					
	サイン			toyoharu tasa	
備考(その他の記載等)					18

IV おわりに

今回、寄贈された素描やスケッチを整理するとともに、推測も交えながらであるが、太佐が瑛九と出会った少年期から 1960 年代までの動向や画業、瑛九との関わりについてまとめた。それぞれの素描、スケッチのテーマや表現における分析、考察については未着手であり、太佐の画業全体についても、今後瑛九をはじめとした芸術家たちと太佐の表現の関連もふまえて調査を進める必要がある。太佐の作品は、画家を廃業すると決意した 1967（昭和 43）年頃の水墨による作品が一つの到達点と言えるのではないかと考えられるが、その後教育者としての顔を持ちながら、新たな作品世界を展開している。

太佐が執筆した芸術論には、美術だけにとどまらず文学や音楽など幅広い分野との関わりが見られる。そこには、見えないものを見ること、また真のリアリズムとは何かという問いが隠されているように思える。今回の調査を足がかりに、今後は太佐の芸術性や彼の生み出す作品世界についての調査、研究へとつなげたい。

【参考文献】

- 植村鷹千代「美の美」、『日本経済新聞』1958. 8. 22
- 瑛九「太佐豊春君のデッサン」『日向日日新聞』1955. 5. 10
- オノサト・トモコ『オノサト・トシノブ伝 生きること・そして生きることの記録』、アート・スペース、1991、pp. 48-49
- 金丸柊一「太佐豊春の絵と思想」『宮崎日日新聞』1991. 1. 10
- 佐々木明子「北尾淳一郎資料について」『宮崎県立美術館研究紀要 Vol. 10』、宮崎県立美術館、2022、p. 33
- 太佐豊春「いつの場合も眞実に仕えた瑛九の芸術」『日向日日新聞』1960. 3. 20
- 太佐豊春「フォト・エージとしての瑛九」『宮崎日日新聞』1996. 5. 20
- 太佐豊春「前衛画家瑛九の再検証6」『宮崎日日新聞』2002. 4. 24
- 針生一郎「太佐豊春・30年の足跡」『太佐豊春 1968年展'88』リーフレット、1988
- 南邦和「太佐豊春未発表展」『放送対話集 宮崎 1967-1972』鉾脈社、1972、p. 119
- 山口徳馬編『宮崎県年鑑 昭和34年版』、日向日日新聞社、1959、p. 247
- 山田光春『瑛九 評伝と作品』、青龍洞、1976、pp. 116-120
- 山本太郎「太佐豊春個展 発表会まで・22」『芸術新潮』10月号、190号、新潮社、1965
- 西都市史編纂委員会『西都市史 通史編』、西都市、2016、p. 111
- 高鍋町美術館編『仲矢勝好と宮崎交通制作室の仕事』記録集、高鍋町美術館、2025、p. 41
- 宮崎県立美術館編『魂の抒情詩 瑛九展』図録、宮崎県立美術館、1996、p. 87
- 「宮崎の文化 その現状と展望 第三部」『毎日新聞』、1974. 4. 9/4. 10

【参考資料】

- 太佐豊春 1968年展'88 個展リーフレット
- 山田光春アーカイヴ（瑛九関係資料） 058-24